淑徳大学　高等教育研究開発センター

NEWS LETTER

2021
VOL.
01

TOPICS

① 中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」について思う

② 「保育内容の理解と方法Ⅰ 黒丸絵本づくり」

③ ところざわサクラタウンから考えるこれからの学び

中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」について思う

文科省のホームページにおいて、令和3年1月26日付の中央教育審議会の答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」が掲載されていました。サブタイトルには「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が掲げられています。

この答申は、初等中等教育のこれからの改革の方向性を示したものであるが、高等教育機関に身を置くものにとって無縁であるとは言い切れないようです。その理由の一つは、「2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」において、「協働的な学び」が主唱されているからです。この「協働的な学び」としては、「探求的な学習や体験活動を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働」すると言った学習形態が例示されています。この学習形態の詳細は、「他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の作り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する」と説明しています。中等教育の教諭免許状が失効している筆者には、具体的なイメージは浮かび上がってきません。ただ、探求的学習、体験活動、他者との協働といったワードから、執筆者が経験した高校教育とは次元が異なるものであることは容易に想像できます。というのも、筆者の高校段階で英語教育は、「大学入試問題の過去問である長文読解、文法そして熟語の暗記」であったからです。探求的学習や体験活動は体験していません。

さて、この答申に基づいた「学びを体験した高校生」が、そう遠くない将来の本学の志願者になってきます。本学の教育方法のあり方がこのままで良いはずがありません。

さらに詳細を見ていきましょう。この答申では高等学校教育の柱の一つに、「地方公共団体、企業、高等教育機関、国際機関、ＮＰＯ等の多様な関係機関との連携・協働による地域・社会の課題解決に向けた学び」とあります。

そこで、第1に、中等教育と本学との接続を如何にしていくか。本学からすると、合格者に対する入学前教育の内容と方法等が課題となります。本学のＡＰは、大学として、いま一つは学科ごとあるいは教育課程ごとに設定されています。入学前教育は、2つのＡＰに応じてそれぞれ策定していく必要があるのではないでしょうか。また、入学を許可したものの、基礎的な面で充分とは言い切れない合格者に対して、大学の責任において補充教育を設定する必要もあります。これも入学前教育です。

Ⅲ.入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

本学は、卒業認定・学位授与の方針及び教育課程の編成・実施方針との関連性を踏まえて、入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）を定める。

1　求める学生像

1. 高等学校の学習内容を理解できている。
2. 本学の教育方針及び教育分野に興味と関心を持ち、本学での学修に目的と意欲を有している。
3. 本学での学修により学位授与が見込まれる資質・能力を、高等学校での活動等からうかがわれる。
4. 自分の考えを、口頭や文章で適切に表現できるコミュニケーション能力を持ち、他者と協調・協働して行動でき、主体的に物事に進んで取り組むことができる。

2　入学者選抜の方法

次の３つの方法を単独又は複数組合わせて選抜を行う。

1. 高等学校での学習成績の状況及び活動の履歴・成果等に関する書類審査
2. 面接
3. 高等学校での履修科目に対する学力検査

3　入学前に学習しておくことが期待される学習内容及び学習態度

高等学校での学習において、科目学習における基礎的な知識の修得及び学習意欲の保持が望まれる。

図1:本学のアドミッション・ポリシー

第2に、GIGAスクール構想です。日本の学校教育において、そのICT環境がかなり見劣りすることは、今般の新型コロナウイルス感染症の蔓延化との関係で、白日の下にさらされました。初等教育、中等教育、のみならず高等教育もその例外ではありませんでした。執筆者自身も、GoogleやPanoptoとは関わることなく、穏やかな年金生活に到達するはずであったのですが・・・・　筆者のことはさておいて、本学のICT環境や情報教育はこれで良いのでしょうか。さらに、数理・データサイエンス・AIも登場しました。基礎教育の整理・見直しが急務です。本学各キャンパスのICT環境、そして入学する学生の状況はどうなっているのか。このあたりの確認からスタートする必要があります。

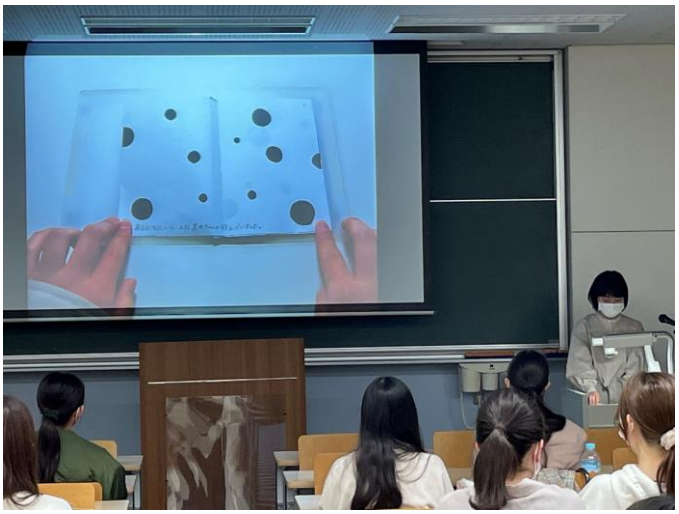
（高等教育研究開発センター長　副学長　下山昭夫）

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#1

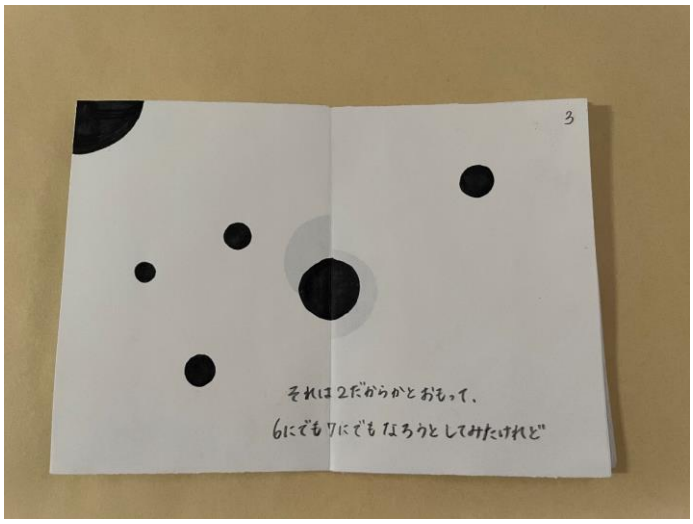
「保育内容の理解と方法Ⅰ　黒丸絵本づくり」

保育者養成課程の科目では、保育者の素質を育むための活動において、従前よりアクティブ・ラーニング型の授業が実践されてきた。桃枝智子准教授が担当する「保育内容の理解と方法Ⅰ」では、保育内容〈言葉〉の視点から、子どもの言葉に対する豊かな感覚を育む保育者の専門性について、演習を通し学生に考えてもらうことを目的に、黒丸絵本づくりの演習を行っている。

黒丸絵本とは、あるルールに従い黒丸を用紙7枚に描き、白紙1枚を加えた合計8枚の用紙から物語を自由につくるというものである。授業では、描かれた対象（黒丸）を捉え、言葉を紡ぎ、物語を生み出していく。授業では、物語を作成することを学生には伝えず、黒丸を描き終えた時点で黒丸絵本を作成することを教示する、という方法をとっている。活動を通して学生は、黒丸から様々な人物、自然物、事象をイメージし物語を生成する。作成した物語は、書画カメラを使用し発表会を開催する。



発表会後、「黒丸だけで物語が作れると思わなかった」「様々な物語の世界が広がり、イメージの世界って素敵だと思った」「誰一人として同じ話がなかった」「人によって捉え方や想像の仕方は異なるのだと改めて思った」と振り返る学生が多くみられた。桃枝准教授は、「対象（黒丸）を捉え言葉を紡ぎ、物語を生み出すというプロセスは、想像し創造するといった保育をデザインする力ともつながる」と述べる。黒丸絵本づくりでは、学生自身が主体となって表現に取組み、かつその表現を他者と共有することで互いのよさを認め合ったり、違いを楽しんだりすることができる。



授業経験で得た知識や能力をどのように自身の保育に具現化するか、学生は4年間のカリキュラムの中で学んでいく。学生の視点でみれば、1週間のカリキュラムが大学生活のサイクルとなり、連続性を持って体験される。上述の例では、黒丸絵本づくりを経験した学生は、同じ日に筆者の授業では「日本の音階に基づく即興的な旋律づくり」、槇教授の授業では「身近な素材を使用したお弁当のレプリカ創作」をしていた。学生にとっては、これらが全体として「保育者になるための学び」であり、相互に関連性を持ち、5領域によって分断できない総合的な保育力が育まれている。

保育者養成に携わる教員間で、カリキュラムの具体的内容を教科間の経験の連続性の視点から授業を省察する姿勢に乏しかったのではないだろうか。こうした問題意識から、教育福祉学科で保育者養成に関わる3名の教員(槇、桃枝、木下)で、互いの授業の省察を通して新たな授業を構想する自主的な研究会を始めた。今後、学生が表現したものをそれぞれが担当する授業で繋いでいく実践を試みる予定である。

（総合福祉学部　木下和彦）

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#2

ところざわサクラタウンから考えるこれからの学び

「まぜまぜ」の魅力？

埼玉キャンパスのスクールバスが発着する東所沢駅から徒歩10分のところに、新しいランドマークが誕生した。「ところざわサクラタウン」である。出版大手のKADOKAWAが開業した施設で、オフィス、工場の他に、ミュージアム、ホール、ホテル、そして神社もある。

所沢市とKADOKAWAが共同で推進する地域づくり、COOL JAPAN FOREST構想の拠点施設でもあり、“何もない”住宅地であった東所沢エリアの印象を180度変えるようなスポットとして注目を集めている。埼玉キャンパスにいらっしゃる機会があったら、あわせて訪れてみていただきたい。

この施設の中でもひときわ注目を集めるのが、巨大な石の建築「角川武蔵野ミュージアム」である。「まぜまぜ」をそのキーコンセプトに掲げている。博物館、美術館、図書館、アニメミュージアムがまぜまぜ、ハイカルチャーからサブカルチャーまでまぜまぜ、本物も偽物もまぜまぜ…、といろいろな“混乱”が企てられている。「安心して不安になれるような、不思議との出会いを楽しめるような場所」であるとの同館学芸員の熊谷周三氏の説明に、思わずハッとさせられた。

ところざわサクラタウン（2021/6/5撮影）

「武蔵野」というテーマ

ミュージアムの5階に「武蔵野ギャラリー」がある。なぜKADOKAWAがこの地にサクラタウンを建設したのか、武蔵野にこだわっているのかが、この展示をみると分かる。

「武蔵野」という言葉の初出は万葉集らしい。「土地とクリエイティブが結びついて生まれた言葉が「武蔵野」だが、その感性を現代人は失いかけているのではないか」（熊谷氏）とは的を射た指摘だと感じた。この地域の風土や、そこから受け継がれてきた慣習からも、得られる経営や観光の学びは多くあるのではないか。

武蔵野ギャラリーにて（2021/6/5撮影）

所沢市と、埼玉キャンパスのある三芳町に広がる三富（さんとめ）新田には「武蔵野の落ち葉堆肥農法」という日本農業遺産がある。新田開発（1694年）当初から引き継がれている資源循環型の農業である。今年、世界農業遺産への認定申請が予定されており、地域では関連するイベントも始まっている。

同じ武蔵野台地に立地している点で、埼玉キャンパスと東京キャンパスをつなぐキーワードにもなるのではないだろうか。経営学部には「埼玉の企業研究」「埼玉の観光研究」という科目があるが、今後ここに「武蔵野」というテーマの追加も検討したい。

コロナ禍の実践的な学びとは

今回、実践科目「フィールドワーク」の校外学習でサクラタウンを訪れた。まん延防止等重

点措置の対象区域に三芳町、所沢市も含まれる状況下であり、事前学習、事後学習はともに遠隔授業で行い、現地視察のみ対面で、感染防止対策に留意した上で実施した。

学芸員の話を伺うだけならオンラインでも可能である。しかし、「まぜまぜ」の環境に身を置き、自らのアンテナでその不思議に気づく、考えるという体験は、現地を訪れて初めて得られるものである。この学びはオンラインには代替できない。あらためて実践的な学びと、リアルな経験の大切さを考えさせられる機会となった。

事前学習、事後学習はオンラインでも可能である。今はむしろオンラインのほうが、学生が自由に議論できる環境が整っている。ゼミでさえも顔出しを嫌う学生は多いが、中には議論を深めるためにカメラオンの重要性を理解し、勇気を示してくれる学生もいる。この科目では、少人数のグループに分かれ、調査のコンセプトや当日巡るスポットを各グループで事前に議論し、動画にまとめてもらった。他のグループの発表を視聴して刺激を受けて、事後学習のプレゼンテーションでは各グループの議論がさらに深まっているようにも感じられた。

事前学習では調査計画について
動画を制作し提出してもらった

現場に赴き、学生が自らの感覚を活用して、主体的に学ぶ。その経験をいかに準備するかが今一番の考えどころだ。対面授業が欠かせないことの最大の理由も、主体的な学びの機会だと言えるのではないか。少ない機会でその効果を最大化するために、いかに授業を設計することができるのか、オンライン、オフライン、それぞれの良さをうまく捉え、活用していくスキルが求められている。

（経営学部　永井恵一）

センター年報原稿募集のお知らせ

淑徳大学高等教育研究開発センターは、2021年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第8号」を発刊いたします。つきましては、原稿を募集いたします。ぜひご投稿ください。

募集する原稿について

① 論文

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、「問題の背景、目的、方法、結果あるいは事例、考察、結論」という形で構成された研究論文。ただし、分量は図表を含み 400 字×50 枚程度を限度とします。

② 研究ノート

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、研究論文に準ずる構成を持つ研究報告、サーヴェイなど。ただし、分量は図表を含み 400 字×50 枚程度を限度とします。

③ 資料

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、学術的もしくは実践的に重要であると考えられる資料等。ただし、分量は図表を含み 400 字×25 枚程度を限度とします。

※淑徳大学の教員や職員、もしくは編集委員会が認めた者であれば投稿可能です。

申込締切

2021年7月16日（金）

淑徳大学高等教育研究開発センター（ページ下部記載）宛に、
件名：「センター年報原稿について」
本文：「お名前」、「ご所属」、「連絡先メールアドレス」、「タイトル（仮タイトルでも可）」、「原稿種別」、「おおよその分量」、「概要」を記載の上、メールをお送りください。

淑徳大学　高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2021 第１号
発行日：2021年6月30日
編集　：淑徳大学高等教育研究開発センター
TEL：043-265-7331　FAX：043-265-8310
E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp